霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第103号
平成24年7月5日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話 0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

越前丸岡藩主　本多重昭が奉納した小石類　関連記事は6～7頁

利用案内

開館時間
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分

■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■専用駐車場あり

夏期特別展
清盛時代の高野山
7月14日（土）～9月23日（日）

平清盛ゆかりの「血曼荼羅」ほか
多数の宝物を展示
（詳細は2～3頁）

第103号　目次

夏期特別展のご案内……2～3
収蔵品の紹介77……4
高野山の古建築 第七回……5
特集陳列に添えて……6～7
高野山の旧不動坂……8～9
販売品のご案内……9
梵音具の世界 その一「磬」……10～11
霊宝館の庭園……12

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

夏期特別展

「清盛時代の高野山」

期間　平成24年7月14日(土)～9月23日(日)

国宝　恵光童子像（八大童子立像のうち）

国宝　烏倶婆迦童子像（八大童子立像のうち）

平清盛と高野山のつながりについて、『平家物語』に語られるお話があります。

清盛は三十代の時、鳥羽院の命にて高野山大塔の再建を行いました。完成時に高野山へ参詣した清盛は、一人の老僧に出会います。その老僧は大塔の再建のお礼を述べるとともに、荒れている厳島の修理を清盛に依頼します。奥之院の方へ去る老僧の姿は、しばらくすると、ふとかき消えてしまい、清盛はこの老僧が弘法大師の化身であったと知ります。ますます信仰を深めた清盛は、金堂に曼荼羅を奉納します。その胎蔵界曼荼羅の大日如来の宝冠は、清盛が自身の頭の血で描いたといわれ、「血曼荼羅」として現在まで大切に伝えられています。

この展覧会では「血曼荼羅」を中心に、清盛の周辺人物ゆかりの品や、清盛の時代の仏像や絵画を展示します。白河院、鳥羽院、後白河院などの参詣記録がある清盛時代の高野山を感じてください。

主な出陳品

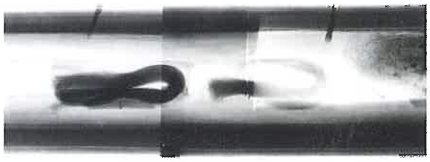
彫刻

国宝　恵光童子像・烏倶婆迦童子像（八大童子立像のうち）　金剛峯寺
重文　板彫胎蔵曼荼羅　金剛峯寺
重文　大日如来坐像　安養院
未指定　一字金輪仏頂尊坐像　金剛峯寺
未指定　千手観音像（源義経守本尊）　金剛峯寺

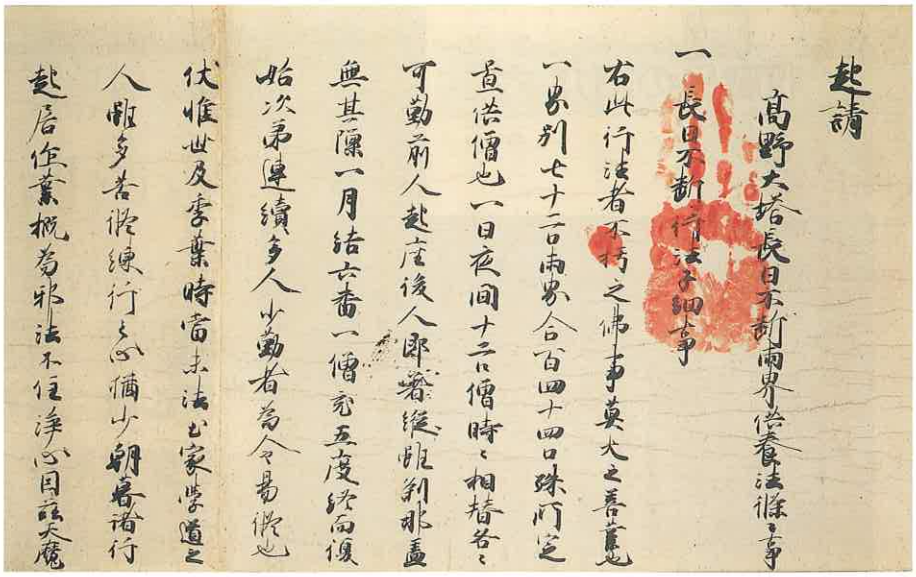
絵画

重文　両界曼荼羅図（血曼荼羅）　金剛峯寺
重文　紅玻璃阿弥陀像　正智院
重文　阿弥陀浄土曼荼羅図　西禅院

重文　両界曼荼羅図（血曼荼羅）部分
胎蔵界大日如来



両界曼荼羅図（血曼荼羅）のうち、胎蔵界曼荼羅の軸内に納められている毛髪（パネル展示）



国宝　宝簡集巻第三十四「後白河法皇御手印起請文」

重文　天野社舞楽装束のうち薄紅地薔薇に反橋文様水干

ミュージアムトーク（展示解説）

7月21日（土）　午後2時～3時
事前申込不要
（ただし拝観料が必要）

重文　阿弥陀如来像　成福院
重文　如来像（伝薬師如来）　金剛峯寺

書跡

国宝　宝簡集巻第三十四「後白河法皇御手印起請文」　金剛峯寺
国宝　宝簡集巻第三十三「源義経書状」　金剛峯寺
国宝　続宝簡集巻第八「俊乗坊重源施入置文写」　金剛峯寺
国宝　金銀字一切経　金剛峯寺
重文　宋版一切経　金剛峯寺
重文　西南院文書巻第十「寛治二年高野御幸記」　西南院
重文　和泉往来　西南院

工芸

重文　天野社舞楽装束　金剛峯寺
未指定　金銅三鈷杵（行勝上人所持）　蓮華定院

考古

重文　奥之院出土品　金剛峯寺
ほか

全八十二点を展示。うち国宝七点、重要文化財五十三点。

国宝・金剛峯寺不動堂（壇上伽藍）特別公開

8月21日（火）
拝観無料　事前申込不要
解説後内拝　午前10時・11時、午後1時・2時
通常非公開の不動堂の内部を、一日限定で公開します。

収蔵品の紹介 77

重要文化財

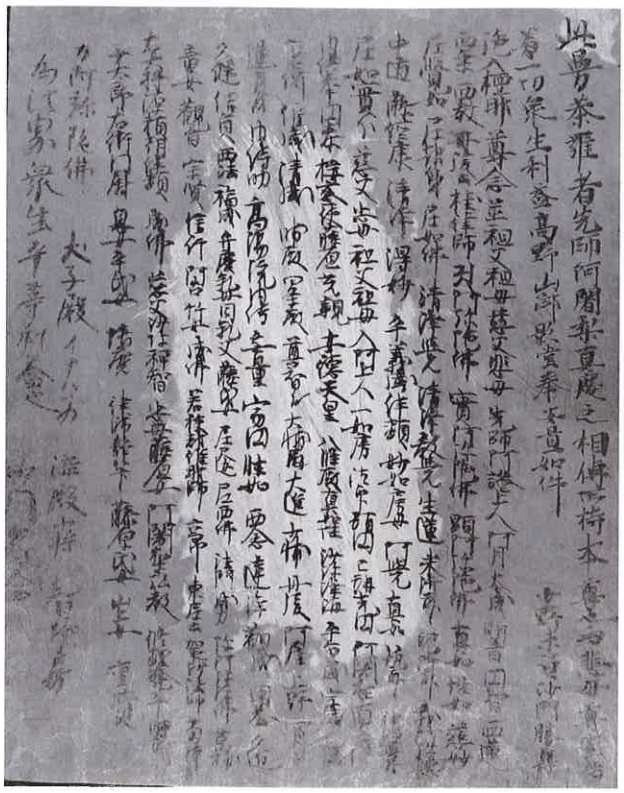
板彫胎蔵曼荼羅　二面

中国唐時代（８～９世紀）

甲面　白檀製　縦19.3cm　横16.3cm

乙面　桜材製　縦19.3cm　横15.1cm

金剛峯寺



甲面の裏面

甲面

乙面

現在放送中の大河ドラマ「平清盛」に血曼荼羅（金剛峯寺蔵）が登場した途端、展示時期の問い合わせが急激に増えました。視聴率低迷とはいわれながらも、やはりテレビの影響はすごいものです。

今回紹介するのは、その平清盛をはじめとする平家ゆかりの品です。甲・乙二枚の板に、いずれも胎蔵曼荼羅が陽刻（線を残して彫る）されています。縦十九cm、横十五～六cmという小さな板にこの緻密な仏像群を彫る技術の高さには驚かされます。これらは中国（唐）でおよそ一二〇〇～一三〇〇年前につくられたもので、乙面は裏に取っ手が付いており、甲面の裏は取っ手を削り取った跡と、その上から墨書が全面に記されています。

墨書によるとこの曼荼羅は、元は阿闍梨真慶が所有していましたが、弟子の尊念が人々の利益（幸福）を祈り、御影堂に奉納した、とあります。三行目以降は結縁者の名前で、平家一門の他、皇族・公家・僧など身分の高い人々の名前が並びます。八～九行目にかけて平清盛やその息子重盛・宗盛・知盛・重衡、清盛の孫安徳天皇（八歳で壇ノ浦にて入水）の名があり、清盛は僧名の「沙弥浄海」も記されています。また四行目の「阿弥陀仏」は仏師快慶のことです。十三行目には「源頼朝伴類（伴類は妻のこと）」ともあり、平家ゆかりの人間だけではないようです。彼・彼女らが全てこの曼荼羅に相見えた訳ではなく、特に平家一門は亡くなった後に縁者が供養のために結縁したと考えられています。

取っ手が付いた曼荼羅がどのように使われたのか、よく分かっていません。印仏であったといわれますが、紙や砂などに押し当てると、正しく彫られている像が左右反転してしまいますので疑問が残ります。

甲面を収める八葉蒔絵厨子は鎌倉時代の作で、厨子のみ単独で重要文化財に指定されている名品です。貞応元年（一二二二）の「御影堂御物目録」によって甲面と厨子はこの時までには御影堂に奉納されていることが判明し、乙面とは別々に奉納されています。

（F）

連載

高野山の古建築

第七回　重要文化財 徳川家霊台（二）

鳴海 祥博

寛永二十年（一六四三）に完成した徳川家霊台は、江戸時代前期を代表する出色の建築です。規模では比較になりませんが、その造形は、東の日光東照宮、西の高野山徳川家霊台といって過言ではないと自負します。

そこで、今回はその建築造形の見所を紹介します。最初は建築様式です。徳川家霊台は「禅宗様」という様式で建てられています。禅宗様式は鎌倉時代に禅宗の教えとともに中国から伝えられたもので、永い間、禅宗寺院だけで用いられていたのですが、安土桃山時代以降、最も高級な形式として特別な建物に使われるようになりました。

禅宗様式の約束事は沢山ありますが、その特徴の一つは、軒を支える「組物」という部材が、柱の上だけではなく、その間にも詰め込むように置かれることです。しかも徳川家霊台では「三手先」という最も格の高い形式の組物なので、とても豪華で賑やかです。

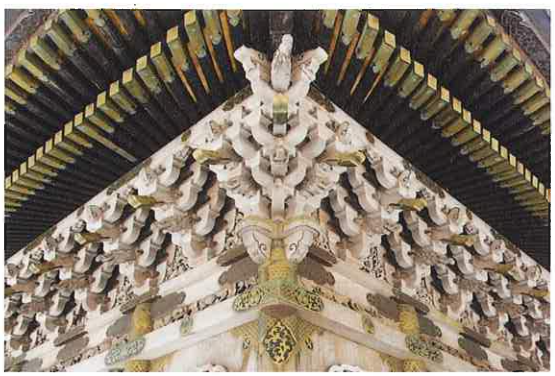
もう一つの大きな特徴は、軒の垂木が扇を開いたように放射状に並ぶことです（これを扇垂木と言います）。扇垂木はその垂木の断面を一本ずつ菱形に、しかも少しずつ形を違えて造っていくという、とても煩雑で高度な大工技術が必要です。また垂木の配置の仕方には幾通りもの秘伝、口伝があります。そんな事から禅宗様式は特定の大工集団、或いは権力者の独占する特別な建築様式となっていったのです。日光東照宮も禅宗様式で建てられています。

次の見所は建築を飾り立てる彫刻です。象、龍、獅子、獏、鳳凰、天女などの彫刻があちこちに嵌め込まれています。天女と鳳凰、霊亀で埋め尽くされた扉は逸品です。壁面に朱漆塗りの枠取りをして鳳凰と獅子の彫刻を嵌め込んだ意匠は他に余り例のない、徳川家霊台独特のものです。

次に飾り金具。柱や長押、垂木、階段、扉等々、いたる所に金色に輝く飾り金具が打ち付けられています。これだけ大量の飾り金具を散りばめた建物は滅多にお目にはかかれません。柱の上下には、普通は絵師が「金襴巻」という文様を描くのですが、ここでは金具を何枚も重ね合わせて表現しています。

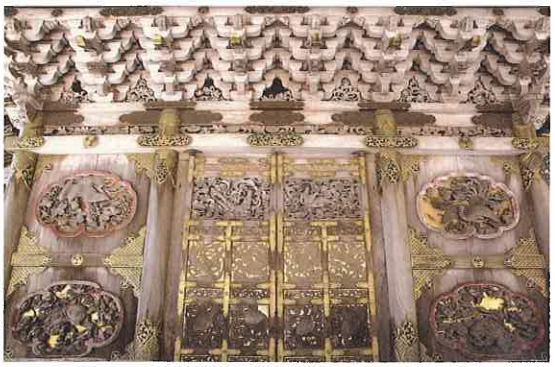
そして漆による仕上げ。軒を見上げると垂木は黒漆。垂木と垂木の間は金箔が貼られ、黒と金の対比が鮮やかです。軒から下は欅の木肌が白く見えています。三百七十年近い年月を経て、今では一見何の塗装もされていないように見えますが、古い文書に「拭漆」とあるので、最初は欅の美しい杢目が透けて見える、春慶塗のような淡いべっ甲色の仕上げだったと思われます。

徳川家霊台は、建築様式、装飾手法ともに、当時の最新、最高の技術を全て取り入れて造り上げられているのです。



軒と組物の見上げ　軒は扇垂木。組物は「三手先」組物を詰め込むように並べ、とても賑やかである。

向拝部分の彫刻　下から獅子、象、龍、天女の彫刻が、地上から天上へ向かって配置されている。



側面の全景　彫刻の嵌め込まれた扉や壁、上方の組物、辻々に所狭しと散りばめられた飾り金具など、装飾性に満ちている。

扉の天女の彫刻　天女は鼓を腰に付け、雲中に舞い音楽を奏でている。足先が見えるのがおもしろい。

特集陳列

「越前丸岡藩主 本多重昭の奉納品 ～重要文化財から羊の角？まで～」に添えて

七月八日まで開催中の特集陳列について、「なんだかよく分からない」との声が内外より少々ありましたので、紙面を頂戴することとなりました。

江戸時代の初め、徳川の時代となって約六〇年、戦乱の世から太平の世へ、ようやく落ち着き始めた頃。丸岡藩（現福井県坂井市丸岡町）第三代藩主による一六五九年から一六七四年の十五年間に少なくとも十度におよぶ、他に類例のない奉納ラッシュ、その内容と特徴について、簡単にご紹介します。

本多重昭という人

本多重昭（一六三四～七六）は丸岡藩四万三千石の藩主で、彼の曾祖父・本多作左衛門重次は徳川家康の家臣「鬼作左」として、また日本一短い手紙「一筆啓上、火の用心、おせん泣かすな、馬肥やせ」を書いたことで知られます。重昭は財政の基礎を固め、城下町を整えて丸岡藩の安定に力を注いだ名君であったようですが、特筆すべきはその過剰とも言える信仰心です。高野山（真言宗）以外にも宗派に関係なく社寺の興隆に力を注ぎ、藩内では本多家菩提寺の本光院（浄土宗）のほか好善寺（浄土真宗本願寺派、のち受法寺に改名）にも深く帰依し、複数の神社に土地や刀剣などを寄進しています。

高野山とのかかわり

重昭は伽藍御影堂に多くの宝物を奉納していますが、それ以前に普門院へもいくつか宝物を納めています（『紀伊続風土記』の「普門院」項に詳しく書かれています）。また御影堂への奉納目録には「中台寺」の名があり、丸岡藩にあった真言宗寺院である中台寺（明治時代に廃寺）が高野山との交流に関係していたようです。『丸岡町史』によると、遺言により重昭の遺骨の半分は高野山に納めたそうですが、現在、高野山に重昭の墓所は知られていません。

奉納品の特徴

奉納品は曼荼羅や密教法具、能作生（弘法大師の「御遺告」によると如意宝珠と同じで願いを叶える宝珠、また如来の分身であるとされます）など、密教色が強いものが多く、高野山にふさわしいといえます。その他…がむしろ印象深いかと思いますが、水晶、真珠、さまざまな小石類、羊の角といわれるもの（実際はクジラの歯だと考えられます）などが挙げられます。小石の中には虚空蔵菩薩を表す梵字が書かれたものもあり、虚空蔵菩薩は如意宝珠をのせた蓮華を持つことから想像すると、これらも如意宝珠として扱わ

虚空蔵菩薩の梵字が書かれた小石
（下の数字は近年記された収蔵番号）

れたり、信仰の対象であったと思われます。江戸時代も中・後期になると、本草学や博物学が隆盛し、貴石・奇石などを博物学的興味で収集する大名もいたようですが、本多重昭の時代はそういう流行が起こる以前で、収集の目的が信仰からだった、ということを示す貴重な事例といえます。

奉納品を収める容器も特徴的で、紙製で宝珠形あるいは球形の容器は金箔を貼ったものと漆を塗ったものがあり、その多くに「卍」の文様が大小さまざまにあらわされています。同じデザインのものは無く、また漆製品の繊細な技術には目をみはるものがあります。福井県は越前漆器で有名ですが、これらも当地で制作されたのでしょうか。容器を包む錦の袋も文様はさまざまですが、色はほとんどが赤系統で、これは「御遺告」に如意宝珠は赤の袈裟で包む、とある事が影響しているのかもしれません。

虚空蔵菩薩像（宝寿院）　左手に持つ蓮華には宝珠が載っています

このように、一国の主による、多大な情熱と財力が注ぎ込まれた、しかし個人的な信仰の色が強いこれらの奉納品ですが、彼がどのような経緯で入手したのかはよくわかりません。何を願い奉納したのか、について記されているものは少なく、一連の奉納の最初期にあたる、普門院へ奉納された釈迦如来及諸尊像（重文）の厨子に「本多飛騨守二世安楽為」とあるのは現世と来世の安楽を願う、という意味です。また『続宝簡集』第八（国宝）に収録されている「本多重昭宝物奉納状案」は、奉納品の多くに記されている墨書と筆跡がよく似ており、重昭自筆かもしれません。これには奈良時代の僧泰澄の収集品だという名石十三個を「国を鎮めるため」、「後の世に伝えるため」御影堂に奉納する、と書かれています。これらの石は現存する奉納品（小石類四十四個）に含まれるとみられ、彼の願いは今のところ叶えられているといえます。しかし如意宝珠信仰、虚空蔵菩薩信仰の傾向が強い他の品々を見ると、まだ他に隠された願いがあるような気がしてなりません。

展示室より

指定品を除き、普段ほとんど公開されることのないこれらの奉納品ですが、宗教的、民俗学的、博物学的、などさまざまな角度から見ることで興味深い発見があるかと思います。「山の正倉院」ともいわれる高野山には不思議な宝物もまだまだたくさん眠っています。

（展示担当　F）

高野山の文化

高野山の旧不動坂

前高野山大学教授　日野西　眞定

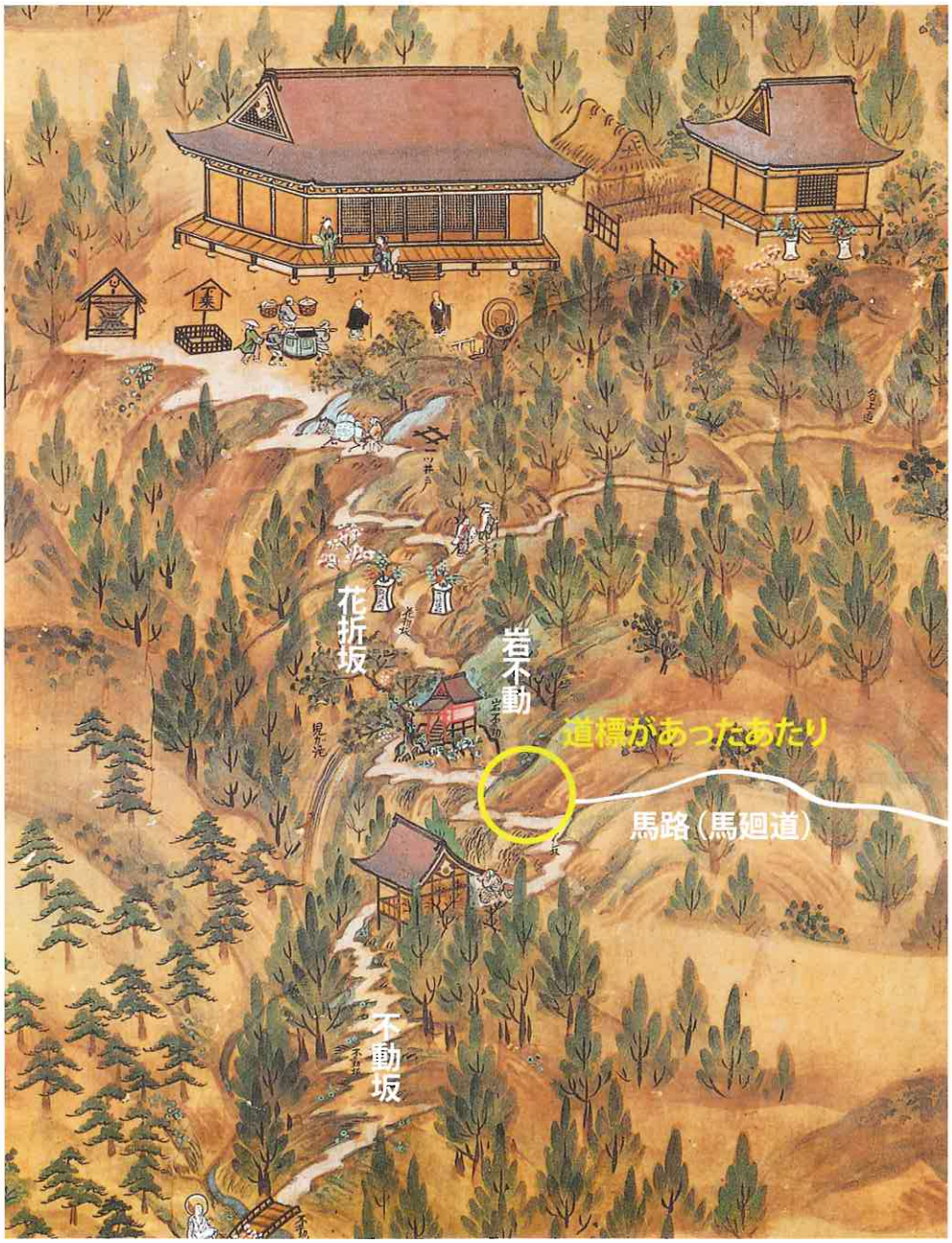


図1　高野山絵図（部分）江戸時代中期　西南院

江戸時代になると、高野山上への入口は七つとなり、「高野七口」と呼ばれた。そのうちの一つである「不動坂口」は、京都・大阪方面からの参詣道の最後の部分にあたる不動坂を登ったところにあった。

現在の不動坂は、南海電鉄極楽橋駅から高野山上の女人堂までの、約二・五キロの登山道をいう。大正四年（一九一五）の高野山開創千百年記念大法会にあわせた県道整備の際、改修されたものである。近年の調査により、改修前の旧不動坂が山中に約二キロ残されていることがわかり、二年ほど前から復元事業が進められていたが、今春完成し、通行可能になった。

旧不動坂の様子は、江戸時代の絵図からもうかがい知ることができる（図1。前回紹介した「花折坂」の花立もある）。難所といわれたつづら折りの「不動坂（通称いろは坂）」もみえるが、現在の不動坂ルートはここを避けて

高野山側　道に面した側　道に面した側　山麓側

図3　道標の三面に刻まれた文字
高野山側：「右　かみや　まきのを　いせ　京　大坂　道」
道に面した側：「南無大師遍照金剛」
山麓側：「寛政四壬子年七月立」

図2　発見された道標
倒れて三分の二ほど地中に埋もれていた

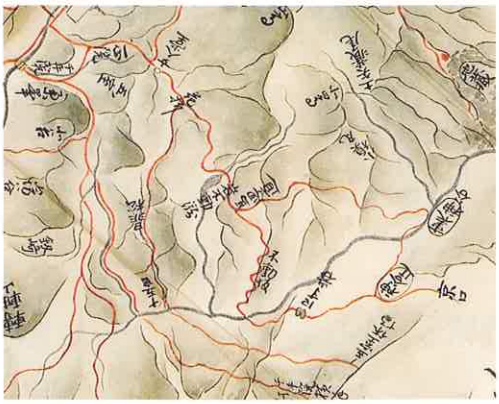


図5　高野寺中并内山外山惣絵図（部分）
元禄十一年（1698）　金剛峯寺

左：馬路　右：下山道

図4　高野山側から見た道標（上）と拡大写真（右）

通っており、緩やかな坂道となっている。

この絵図には描かれないが、「岩不動」（現在は何も残らない）のあたりで道が二手に分かれ、西北に「馬路（馬廻道）」が延びていた。その分岐点にあった道標が、調査の過程で発見され（図2）、もとの場所に立てられた。道標の三面にはそれぞれ、寛政四年（一七九二）の年号、「南無大師遍照金剛」の法号、さらに「右　かみや　まきの　を　いせ　京　大坂　道」の道案内が刻まれている（図3）。注意したいのは、この道案内が、高野山から下りてきた人に向けられた点である（図4）。つまり「右」というのは、高野山側から見て右の下山道をさし、左は馬路となる。元禄十一年（一六九八）の絵図（金剛峯寺、図5）にはすでに、「馬廻道」として、不動坂の途中から分かれ、裏（浦）神谷方面へ下る道が描かれることから、馬路は、道標に刻まれた寛政四年より前に存在していたらしい。すると、この道標は寛政四年に立て替えられたものかと推測されるが、定かではない。今後の研究がまたれる。

販売品のご案内

オリジナル手ぬぐいに新デザイン追加

不動明王立像（重要文化財、元千手観音堂安置）をモチーフにした「不動明王」、弘法大師が唐から投げたという三鈷杵（さんこしょ）とそれが掛かった高野山の松の葉をイメージした「三鈷杵と松」の二種類です。いずれも本染め。一枚八百円。

不動明王

三鈷杵と松

梵音具の世界

その一

「磬」

梵音具とは、仏教の法会などで使う楽器（鳴り物）をさします。高野山で使われる梵音具の発祥や歴史について、ご紹介していきます。

図1　礼盤の右脇に置かれた磬台（磬架）にかかる磬

図2　中国夏代の石磬　山西省襄汾県陶寺遺跡出土
高32cm、幅95cm

図3　中国戦国時代の編磬（獣首編磬）　故宮博物院蔵
高 最小4.1cm～最大6.7cm、幅 最小15.0cm～最大27.6cm
6枚1組になっています

みなさんは磬という楽器をご存じでしょうか。通常金属製の打楽器で、僧侶が行法中に打ち鳴らして使います。小さな撞木（梓）を右手に持ち、磬の中央部分（撞座）を軽く叩くと、澄んだ音が響きます。高野山では、僧侶が座る礼盤の右脇に、つるした状態で置かれているのが見られます（図1）。まずその歴史からひもといてみましょう。

磬の発祥は中国です。漢字をみると下に「石」がついていることからわかるように、最初は石製の素朴なものでした。古いものでは、中国初代の王朝といわれる夏（B.C.二〇七〇年頃～B.C.一六〇〇年頃）の磬が出土しています（図2）。

続く商代（B.C.一六〇〇年頃～B.C.一〇四六年）に入ると、音の高低をつけた複数の磬をセットで用いるようになります。後に、それらを「編磬」とよび、一枚だけで使うものを「特磬」とよんで区別するようになりました。北京の故宮博物院には、戦国時代（B.C.四〇三年～B.C.二二一年）の銅製の「編磬」が収蔵されており（図3）、この頃には金属製のものが作られていたようです。

中国の磬は、宮廷の儀式や祭祀で用いられていましたが、仏教儀礼にはいつ頃とりいれられたのでしょうか。

『高僧伝』（五一九年成立）は、梁の慧皎が高僧の伝記を集めたものですが、その中に、寺院の「磬声（磬

の音）」が遠くから聞こえた、寺の中で「磬」の音が自然に鳴った、などという表現が散見されます。よって、六世紀初頭の中国ではすでに、磬が寺院で使われていたらしいことがわかります。

こうした磬がいつ日本に伝わったのかは不明ですが、法隆寺や大安寺の天平十九年（七四七）の財産目録（『伽藍縁起（がらんえんぎ）并流記資財帳（ならびにるきしざいちょう）』）をみると、いずれも「磬」が載っていることから、少なくとも八世紀中頃には、日本の寺院でも使われていたようです。（ただし、先述の中国の寺院も含め、別の音具を磬と呼んでいた可能性もあります）

ところで、中国の磬は本来「へ」の字形をしていました。奈良の正倉院に残る鉄製の古磬（図4）は、残念ながら右端が欠けていますが、元は「へ」の字形だったと想定できるようで、中国とのつながりを感じさせます。

日本に伝わった磬はやがて左右対称の山形となり、植物や昆虫を象（かたど）ったものまで登場します。高野山にもそうした珍しい磬がいくつか残されています。図5は蓮華を象ったもので、細かい毛彫りが施されています。また、蝶の姿をしたものもあります（図6）。リズミカルな曲線が美しく、左右の触角の先端を丸めて、紐を通す鐶（わ）にしているところなど、凝ったデザインになっています。

鎌倉時代以降になると、山形の磬の表面に、撞座を中心に孔雀が向かいあう姿をあらわしたものが主流になっていきますが、その過渡期にあるといえるのが、図7です。撞座の左右の文様をみると、一面は蓮池に遊ぶ孔雀、もう一面は洲浜に舞う尾長鳥と蝶になっています。ゆったりとした浄土の情景を留めたこの磬は、仏教の法会で使うのにふさわしいといえます。

磬の音は、高野山の山内寺院はもとより、弘法大師の御廟がある奥之院でも聞くことができます。ぜひ耳を傾けてみてください。

（N）

図版出典：
図2 劉東升・袁荃猷編撰『中国音楽史図鑑 修訂版』（北京、人民音楽出版社、二〇〇八年）
図3 故宮博物院（北京）ホームページより http://www.dpm.org.cn

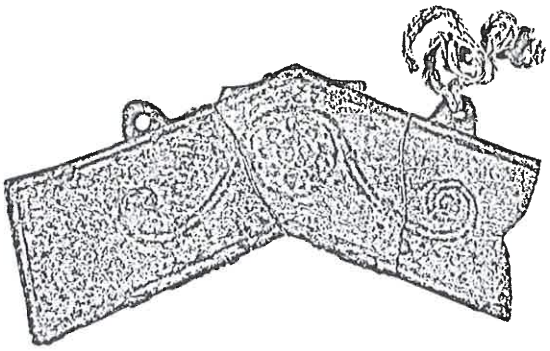


図4　正倉院に残る鉄製の古磬（鉄磬、南倉178）のトレース図

図5　重要文化財　金銅宝相華文蓮華形磬　鎌倉時代　赤松院
高9.6㎝、幅23.0㎝

図6　重要文化財　金銅蝶形磬　鎌倉時代　親王院
高11.4㎝、幅18.9㎝

図7　重要文化財　銅花鳥文磬　鎌倉時代　清浄心院
高11.8㎝、幅23.0㎝

霊宝館の庭園

アカメガシワ・赤芽柏・御菜葉・菜盛葉

元高野山高等学校長　亀岡　弘昭

アカメガシワはトウダイグサ（燈台草）科・アカメガシワ属の樹高十五メートル、幹の直径が五十センチ程になることもある落葉高木です。

高野山では山麓から山上にかけて広く分布する樹種の一つで、日当たりのよい道端の斜面や建造物の近くの空き地の崖状の所、森林の周縁部（林縁）、二次林のうちでも特に疎林の谷筋などに自生しています。

晩春から初夏の新芽若葉

アカメガシワという和名は、この樹の晩春から初夏の鮮やかな朱紅色の新芽若葉が人目をひき、成葉が食物を盛ったり包んだりするために用いられてきたことによるといい、赤芽柏の字があてられています。

現在は廃れつつある、この成葉の利用と、それに関連する方言名の一部を紹介します。

稲作の苗代に籾種を播き終えた日や田植え完了の日に「田の神」の食物を、この葉に盛り供えたといいます。盂蘭盆には先祖の精霊を、お迎えして、おもてなしをする際の精進物を盛る、この葉の長い葉柄二本を箸として添える、この樹の葉枝を精霊棚の両側に供える、などのことがかなり多くの地方地域で行われていたようです。

雌株の雌花と成葉

雄株の雄花と成葉

それらのことに由来すると思われる、ごさいば（御菜葉）、あかごさいば（赤御菜葉）、ぼんかしわ（盆柏）、ぼんのき・ぼんぎ（盆木）などの方言名が遺されています。

往時の日常生活や先にあげたものの他の民俗行事などにおける、この葉と食物の関係を窺い知ることのできるものとしては、かしわ（柏餅に利用）、さいもりば（菜盛葉）、すししば（鮓柴）、だんごのき（団子の木）、ちまきしば（粽柴）、みそもり（味噌盛）などがあります。

なお、この樹には、ひさき、ひさげ、ひっさき、などの方言名もあり、『万葉集』で四首に詠み込まれている久木はアカメガシワのことであるという説があり、分布や生態など諸観点から、ノウゼンカズラ科のキササゲ説やツバキ科のヒサカキ説などより説得力が。

この樹種は雌雄異株で雌株（木）と雄株（木）があり、夏、それぞれ枝先に雌花雄花を円錐花序・穂状につけ、秋に雌株では偏球形の果実が黒熟し、両株ともに黄葉します。